

明石の朝霧

土田龍太郎

古今和歌集卷九に入れる

ほのぼのとあかしの浦のあさ霧に

嶋がくれ行舟をしぞおもふ

といへる一首、柿本朝臣人麿の詠める秀歌として弘く知られたれど、古今集撰者はこの歌の作者の名を擧げず、題しらずよみ人しらずとのみ標しるべして、ただ左註にて、ある人の言はく柿本人麿が哥也と加へ記したり。

そも柿本人麿といへば、卓れたる萬葉歌人の列に名を掲ぐるをなべての習ひとすれど、萬葉集に入りたる人麿の歌げに夥しくて、長歌はほぼ二十首短歌は七十首あまりに及べり。

柿本人麿と山部赤人とをともに仰ぎ尚ぶは古き習ひにて大伴家持は山柿とあはせ稱いひたり。人麿と赤人といづれまされりや、とみにはえ定めがたきこと、貫之は人まるは赤人がかみに立たむことかたく、あか人は人まるが下にたたむことかたくなむありける

とぞ古今集假名序に記したる。さはれ世移るままに歌人どものいとど神のごとくに崇めもてゆきしは人麿なること、柿本影えいぐ供記柿本講式などにてつぶさに知るをうべし。人麿を歌の聖ひじりと仰ぐはいつのころよりの習はしなるや、えつまびらかならねども、貫之同じ假名序にて

かのおほむ時におほきみつのくらみかきのもとの人まるなむうたのひじりなりけると記したり。かのおほむ時といへるは文武天皇の御代をさせり。

同じ假名序の中に貫之の引ける人麿の歌としては

梅の花それとも見えず久方の

あまぎる雪のなべてふれれば

ほのぼのとあかしのうらのあさぎりに

島がくれ行く舟をしぞ思ふ

てふ兩首のみなれど、いづれも萬葉集には見えて、古今集卷六卷九に入りたり。

人麿の歌の聖の名に立てるはむねと萬葉集に入れる雙びなき詠作によれることまぎれなし。さはれ人麿の秀歌を收むるは萬葉集のみにてもあらず。かの四千五百首の中のいづくにも見えねど、後の敕撰集に私撰集また歌合のたぐひに入りて今に知らるる人麿の詠草くさぐさあり。いづれ眞作なりやいづれ假託なりや今さらに勘へむもさらにせんなければ、これらの歌になにとやらむ一ふしおもしろきあり心深くあはれなるもあればゆめゆるがせにす

まじくて、よく心をつけてけみせではあるべからず。

かの四條大納言藤原公任、ならびなき有職の才學にまかせて北山抄を著せしかども、譽れさらにいちじるきは和歌の方にて、私撰集には拾遺抄和漢朗詠集金玉集三十六撰あり、歌論としては新撰髓腦和歌九品などあり、ほかに詠草多く遺りて、いづれも歌人の世々にめできたりて今に及べり。

三十六人撰にはいはゆる三十六歌仙の詠草百五十首を収めたり。はじめに列ぬるは人麿の歌十首なれど、今はただその六首ばかり左に引きみるべし。

昨日こそ年は暮れしか春霞

春日の山にはや立ちにけり

梅の花それとも見えず久方の

天霧る雪のなべて降れば

飛鳥川もみぢ葉流る葛城の

山の秋風吹きぞ頻くらし

ほのぼのと明石の浦の朝霧に

島隠れ行く舟をしぞ思ふ

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の

長々し夜を獨りかも寝む

もののふの八十字治川の網代木に

ただよふ波の行方知らずも

飛鳥川もみぢ葉流る云々は萬葉集十に入れる

明日香河黄葉流葛木之山木葉者今之散疑

に同じく、もののふの八十字河云々は心深きことよなけれど、卷三に見ゆる

物之部能八十氏河乃阿白木爾不知代經浪乃去邊白不母

にほかならず。さらに梅の花それとも見えず云々の一首、上の句のみ萬葉集八に入れる

吾勢子爾令見常思之梅花其十方不所見雪乃零有者

の下の句に似たれば類歌なりともやいふべからむ。されば公任卿の選びし人麿十首の内、さながら萬葉集に由れりやに見ゆるはわづか兩首にすぎねど、これげに思ひのほかなりともやいひつべからむ。

かつて柿本朝臣人麿歌集なる私家集ありて、これつとに亡はれたれど、この歌集には載りて萬葉集にはつひに入らでやみにし人麿の自詠少からざるめれば、萬葉集に見えねばとて人麿の歌ならじとあながちに思ひ定めむはずるに危ふかるべし。なほ柿本集といへる二

卷の私家集のごときもの今に遺りたれどこはとるにたらざるにたり。

三十六人撰に先立ちて公任のものせし前十五番歌合にては、時代同じからぬ歌仙三十人の詠草を三十首列ねたれど、人麿と赤人の歌を番へたること左のごとし。

十五番

人丸

ほのぼのと明石の浦の朝霧に

島隠れゆく舟をしぞ思ふ

赤人

和歌の浦に潮満ち來れば濁をなみ

葦邊をさして鶴鳴きわたる

さらに和歌九品にては十八首の歌を選びて上品上より下品下までの九品に分ちたれど、これ佛經に説ける九品佛に擬へたるにまぎれなし。上品上とては

春立つといふばかりにやみ吉野の

山もかすみてけさは見ゆらん

ほのぼのと明石の浦の朝霧に

嶋かくれ行く舟をしぞ思ふ

てふ壬生忠岑と人麿の歌を並べたり。公任卿この兩首につきて、これはことばたへにしてあまりの心さへある也と記せれど、あまりの心とは餘情よせいにことならず。ほのぼのとの歌の方には後の世の連歌師宗祇の評語ありて、心詞ととのはりてしかも幽玄にたけたかく餘情ありと云へりしとぞ。同じ歌また和漢朗詠集の行旅部に入りたり。

貫之この歌をはじめ讀人知らずと見なせしことすでに述べりしがごとし。さればこれ必ず人麿の作なりと定めがたけれどそははたいかにもありなむ。ここに比べまほしきは萬葉集卷八に載れる一首なり。この卷の内に柿本朝臣人麿の羈旅の歌とて八首ほど列ねたれどそが中の

天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見

あまぎかるひなのながちをこひくればあかしのとよりやまとしまみゆ

てふ一首たへなることよなければやく秀歌の名に立ちたるはむべことわりなり。ほのぼのとの一首まことの作者たれなりやは知られねども、人麿作なるにまぎれなきこの天離るの歌と同じく明石の浦のいみじきありさまをえもいはず詠みたるにおのづと思ひよそへられて、これまたこよなき秀歌なればいつしか世の歌人の人麿作と思ひしみてしにてもあるべし。

ほのぼのと夜明けぬれどなほ霧わたる明石の浦をこぐ舟の島隠れゆくさま、舟の行方や
いづこならむとゆかしき心地さへそひつる、まのあたりに見るがごとくなれど、はるけき思
ひつのであはれなるときはまりなし。かかる一首、近き世にはゆる紋景歌なりともい
ひつべけれども、まこと卓れたる紋景歌の紋景ばかりにて終はることわりさらにあるべか
らず。

明石の浦の繪に畫けるがごとくにめでたきけしきを詠めるこの歌を心の中にくりかへし
誦しゆくにつれて、詞の表にこそは顯れね、明石の風光の奥に秘めるなにとやらむえもい
はれぬくすしきものに思ひいたらではあるべからず。この捉へむとして捉へがたきもの、日
く言ひ難きはさることなれども、しひて言に云ひ出でむとせば、天地を貫く眞なりともや
云ひつべからむ。一首の要となれるはげにかかる乾坤の實相のごときにはかなかるべし。

藤原公任、ほのぼのと明石の浦の一首を尚ぶことひとかたならず、さまざまの歌選びにあ
たりて、この一首を採るを忘れず、ことに和歌九品の内にてはこれを至極の秀歌と仰ぎみし
ことすでに右につぶさにけみせしがごとし。この歌のいみじきをはやく悟りぬること、貫之
にならひしにもありけれども、この卿の大和歌に寄する志のなべての人にぬきいでて高
かりしこと、今しのぶにもなほあまりありともやいひつべからむ。

(令和七年十一月二十七日受附)